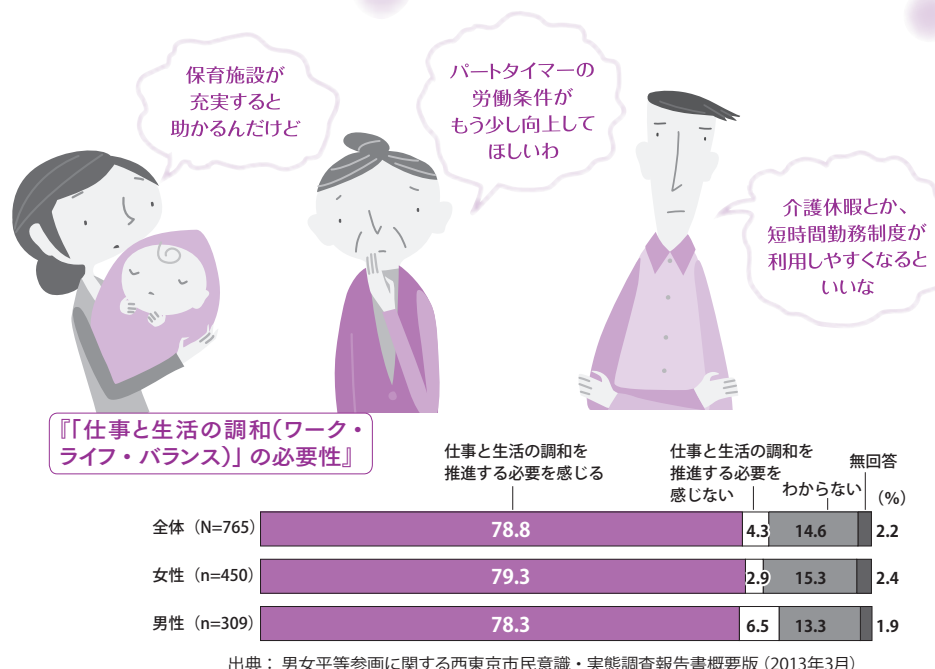


幸せの特効薬

～ワーク・ライフ・バランスを始めよう～

7月20日、男女共同参画週間事業として、ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)をテーマとした講演が西東京市民会館で行われました。西東京市でも、多くの人がワーク・ライフ・バランスの必要性を感じています。今号では、育児・介護に向き合いながら仕事でも活躍されている渥美由喜さんのお話をとおして、いきいきと暮らしていくためにこれからの社会に欠かせないワーク・ライフ・バランスを実現させるヒントをお届けします。



「誰もが育児・介護」の時代へ あなたもワーク・ライフ・バランスを

介護退職者が年間約10万人
男性は女性の約2倍の増加率に

私は今、妻と共働きで、2人の子どもを育てています。父の介護のために仕事を辞める寸前まで追い込まれた時期がありますし、病気を抱えた下の子の看護もしています。

そういったこともあって、ワーク・ライフ・バランスは本当に重要だと感じていますが、最近では企業も熱心に取り組むようになってきています。人口減少社会になり、働き手が減っていく中、働きがいのある職場を作らなくてはやっていけないと気づき始めたからです。

今、介護している570万人の過半数(290万人)は働いています。社員の1割前後は家族に要介護者がいます。そして、介護を理由に仕事を辞める人は年間およそ10万人います。増加率は男性の方が高く、女性の約2倍。介護や看護は、誰もが自分自身の問題として考えておかないといけないのです。

50代前半の夫婦で、両親が4人も生きていけるとすると、4人のうち

少なくとも1人が要介護になる確率は約60%。自分たちが50代後半だと、約90%になります(表1)。まさに企業にとつて中核となる40～50代の従業員が直面することになるのです。

かつては主婦がお年寄りや子どもを面倒を見ていましたが、日本は20年前にすでに共働きの世帯数が片働きの世帯数を上回っていて、その差は広がる一方です。

誰もが介護や看護、子育てをしなから働かざるを得ない時代がやって

表1 50歳代後半で介護する確率(%)

妻	両親とも故人	母親のみ生存	父親のみ生存	両親とも生存
夫				
両親とも故人	0.0	46.6	30.5	62.9
母親のみ生存	46.6	71.5	62.9	80.2
父親のみ生存	30.5	62.9	51.7	74.2
両親とも生存	62.9	80.2	74.2	86.2

お互いの両親が生きていると介護の確率86.2%!!

きます。問題は、その社会の変化にどう対応するかです。選べるのはやるかやらないかではなく、「先にするか後回しにするか」だけです。

ワーク・ライフ・バランスは「仕事と家庭、どっちを取るか」ではありません。「ライフ」を広く人生と考えれば、「ワーク」は「ライフ」という土台に載っているのだと思います。豊かな人生、質の高い生活が質の高い仕事につながる。メリハリの利いた仕事が生活のゆとり、暮らしの向上につながる。この相乗効果が、一番重要なポイントです。

「がんジー」のような「イクメン」が地域を育む

ワーク・ライフ・バランスは、地域戦略として取り組むことも大切で

が、東京はこれから急速に少子高齢化が進み、財政的にも厳しくなり



▲子どもたちとの関わりを熱く語る渥美さん

ます。ここで子育てをしたい、ここでずっと暮らしたいという魅力ある地域にしなければ、どんどん貧乏になっていきます。

3・11以降、環境やエネルギーへの意識が高まりましたが、ワーク・ライフ・バランスは「持続可能性」という点でよく似ています。ワーク・ライフ・バランスを実現させ、地域は持続可能な社会、子どもがたくさん生まれて育つという場所にならないと、続いていきません。

私は、ある出来事をきっかけに公園で子どもたちと遊ぶ「子ども会」を始めました。辛い事情を抱えた子もたくさんいて、その中で感じたのが「ナナメの関係の大切さ」。

今、親子などの「タテの関係」、友人などの「ヨコの関係」と違って、地域の人とつながる「ナナメの関係」はほとんどなくなっています。逃げる場所がなく、構ってくれる人がいないのは苦しいものです。子どもたちが社会に出て困難にぶつかった時、気にかけてくれた地域の大人の存在は、心の支えになるかもしれません。これからは、自分の子どもを育てるイクメンから、地域の子どもも大切に育てるイクメン(地域で活躍する男性)が増えれば、もっといい地域になると思います。

子どもの頃、私たちが「がんジー

子どもたちの心に触れて～渥美さんの宝物～

私が「子ども会」で出会った子の一人に、Aちゃんという当時小学3年生だった女の子がいます。

もう16～17年前のことです。その年の元旦は大雪で、誰も外を歩いていないほどでした。本来は「子ども会」をやる予定でしたが、さすがにこの雪では誰も来ないだろうと思い、自宅にいました。でも、念のため見に行ったのです。

広い公園は一面雪景色、奥に雪だるまがあるだけ。安心して帰ろうとしたら、私を呼ぶ声がある。雪だるまに見えたのは、私を待つうちに、すっかり雪をかぶってしまったAちゃんとその弟でした。すぐに謝って、雪合戦などでひとしきり遊んだ後、一緒におやつを食べていたら、Aちゃんが言いました。「私、最近学校でバイキンって言われてるんだ」と。

Aちゃんの家は父子家庭で、彼女は一生懸命家事をしている頑張り屋さんでした。しかし、洗濯が間に合わず同じ服を続けて着ていくようなことがあって、クラスでそう言われていたのだそうです。

誰かに相談したかと聞くと、Aちゃんは、お正月も働いてくれているお父さんにも、学校の先生にも言えないと答えました。たぶん、今日は他の子は来ないだろう、「子ども会」のおじさんになつたらちょっと話してみてもいいかなと思って、雪の中で待っていてくれたのでしょう。

当時の私は、週数回、2～3時間だけの「子ども会」なんか自己満足じゃいいのか、と無力感を時おり抱いていました。そんな中、Aちゃんが誰にも言えない悩みを打ち明けてくれたおかげで、地域での自分の立ち位置が分かった気がしました。これまで出会った2000人の子どもたちとの時間は、大切な宝物です。

と呼んでいた、怖くて優しい近所のおじさんがいました。庭の柿を盗もつとした私たちを厳しく叱り、次はちゃんと頼みに来いと言ってくれる。柿を手に渡してくれました。私は今も「がんジー」を懐かしく思い出すように、子どもたちが大人になった時、「子ども会のおじさん」のことを覚えていて、自分も次の世代のために何かしようと思ってくれればいいなと思います。



凛とした和服姿の「がんジー」は、かっこ良かったなあ

Profile

渥美 由喜 (あつみなおき)
東レ経営研究所研究部長
厚生労働省政策評価に関する有識者会議委員
1968年生まれ。西東京市出身。東京大学法学部卒業後、(株)富士総合研究所、(株)富士通総研を経て、2009年東レ経営研究所入社。専門は労働雇用・企業経営、人口問題など。プライベートでは7歳と3歳の2児の父親であり、2回育児休業を取得。現在、西東京市男女平等参画推進委員会で委員長を務める。